

元幹部自衛官による



(その十二)

# 浦塩艦隊の捕捉制圧と シーレーン防衛

杉之尾 宜生 陸自61(防5)

## はじめに

日露戦争における日本陸軍の勝利には、海上輸送で大量かつ迅速に南満洲に戦力を結集できることが必要であった。その前提が制海権の確保であった。

そのため明治37年(1904)2月8〜9日夜、我が聯合艦隊の駆逐隊は、旅順港外に停泊する露国の太平洋艦隊の主力を奇襲攻撃し、2月9日午後には仁川沖海戦が生起し、日露戦争が勃発した。引き続き2月24日から5月3日にかけて、我が聯合艦隊は3次にわたる旅順港閉塞作戦を敢行した。これらは、いずれも黄海の制海権獲得のための作戦であった。

これらの作戦については、既に本誌の「日露戦史」の「その3」で既述した。また明治38年(1905)5月27日に生起した日本海海戦については、平成17年5月号に掲載する予定である。

本号では、これらの海戦を除いた日露両海軍の作戦・戦闘について、制海

権の争奪(シーレーンの攻防)という観点から論述する。

◆緒戦における露太平洋艦隊の作戦構想と浦塩艦隊の第1・2回出撃  
(明治37年2月11日/24日)

露国の太平洋艦隊は、明治34年(1901)に策定した対日作戦計画に基づき、早い時期から戦力を整備し、作戦計画を練っていた。日露の關係が緊張し、日露外交交渉が開始された明治36年(1903)8月12日、露国皇帝は勅令をもって極東総督を新設し、アレクセーエフ海軍大将を総督に任命し、対日戦争準備を本格化させている。

露国太平洋艦隊の基本任務は、渤海・黄海・朝鮮半島周辺海域の制海権を確保することであった。このため艦隊の主力を旅順に配備し、日本海軍の黄海進出を阻止して日本陸軍の朝鮮半島への上陸を妨害するとともに、有力な一部の艦隊をウラジオストクに配備し、日本のシーレーンおよび日本列島

沿岸を脅威し、これにより我が聯合艦隊を牽制し、戦力の分散を強要しようとするものであった。

戦争勃発時、ウラジオストク軍港に配備されていた太平洋艦隊の支隊は、一等巡洋艦の「ロシア」、「グロモボイ」、「リューリック」、二等巡洋艦「ボガツイリ」、仮装巡洋艦「レーナ」、および水雷艇18隻であった。

「ロシア」に座乗する支隊司令官レイツェンシュテイン大佐は、積極果敢な海軍軍人で、旅順が我が聯合艦隊の奇襲攻撃を受けたと知るや、日本海軍の戦力の牽制抑留、戦力分離と日本列島沿岸の威圧を狙って、早くも2月9日には結氷中のところ砕氷船をもって港外の航路を啓開し、「ロシア」以下4隻の巡洋艦を率いて津軽海峡方面に第1回の出撃を敢行した。

同支隊は、2月10日22時10分、日本の青森県の鰺作崎の沖合いで、山形県酒田港から北海道の小樽港へ航行中の汽船「奈古浦丸」(1084総トン)を発見し、空砲1発をもって威嚇し停戦を命じ、船舶を放棄するよう信号で命ずるとともに、実弾射撃を敢行して下船を強要した。船長は乗客と船員を救命艇2隻に移乗させたが、この際砲撃で受傷した船員2名が海中に転落し死亡している。救命艇は陸地に向かつて漕ぎ出したが、暗艦2隻に捕捉され、

人員は露艦に収容された。結局、奈古浦丸は砲撃により沈没し、日露戦争における船舶損耗の第1号になった。

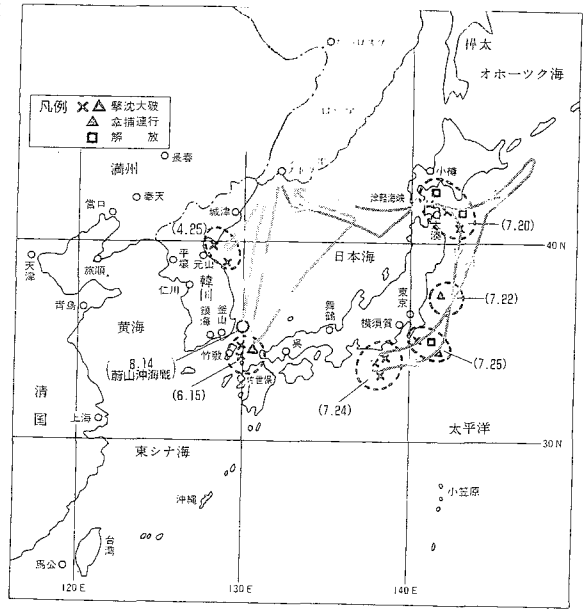
このころ同じ海域で、酒田港から同じく小樽に向け航行中の全勝丸(323総トン)も砲撃により損害を被ったが、露艦は同船を撃沈することなく立ち去った。同船が撃沈されることなく見逃されたのは、露国海軍の脅威が緊迫したものであることを日本人に周知させる心理戦の一環であったと言われている。

大本営は、この露国艦隊は、2月11日夜には津軽海峡を通過して、12日早朝には小樽や函館など襲撃する可能性があると警告していた。この種の情報は一般国民の間にも伝播し、特に函館の住民はパニック状態に陥っていた。このような混乱が沈静化したのは、13日夕刻に陸軍部隊が配備され、翌14日に戒厳令が布告されたからのことであった。

しかし浦塩艦隊は、天候に恵まれなかったため、日本列島の沿岸部における長期間の行動を断念し、2月14日には母港であるウラジオストクに帰港している。

かくして露国浦塩艦隊のシーレーン制圧破壊作戦は、開戦の劈頭から果敢に展開された。第1回は6次にわたる露国浦塩艦隊のシーレーン遮断破壊作

〔第1図〕露ウラジオ艦隊行動図  
(明治37年2月9日～8月14日)



◆上村艦隊によるウラジオストク威圧の開始 (明治37年2月29日)

緒戦の勝利で露国太平洋艦隊の主力を旅順港内に閉塞させた日本軍は、黄海の制海権を維持して、陸軍戦力の大陸への推進が可能になった。

露国の浦塩艦隊への対応としては、当初は聯合艦隊には属さない独立艦隊である旧式艦艇からなる第3艦隊(片

岡七郎中将)が、対馬の竹敷要港を根拠地として、対馬海峡の安全確保に任じていた。しかし、第二線クラスの実勢では浦塩艦隊のシーレーン攻撃に対応することが次第に明らかになってきた。

浦塩艦隊の第2回出撃は2月24日、巡洋艦4隻をもって元山港と朝鮮半島の北部沿岸を威圧して、3月1日ウラジオストクに帰港している。

第2回出撃を確認した大本営は、第

〔第1表〕ロシアウラジオ艦隊に捕捉された船舶とその結末 (明治37年4月25日～7月25日)

捕捉月日、海域	船種	船名	トン数	露艦の処理	捕捉月日、海域	船種	船名	トン数	露艦の処理
4.25 元山港	民間汽船	五洋丸	600	沈没	7.20 尻矢崎沖	帆船	第二北生丸	110	撃沈
〃	運送船	金州丸	3,860	〃	7.22 塩屋崎沖	独汽船	アラビア号	2,865	ウラジオ
6.15 玄界灘	陸運送船	常陸丸	6,180	沈没	7.24 御前崎沖	英汽船	ナイトマンダ号	4,310	撃沈
〃	〃	和泉丸	3,230	〃	〃	帆船	自在丸	200	〃
〃	〃	佐渡丸	6,230	〃	〃	〃	福就丸	130	〃
7.20 津軽東口	汽船	高島丸	320	大破沈没	7.25 野島崎沖	独汽船	テア号	1,615	撃沈
〃 恵山岬沖	英汽船	サマーラ号	不詳	漂流沈没解放	〃	英汽船	図南号	2,270	解放
〃 尻矢崎沖	帆船	喜宝丸	140	撃沈	〃	〃	カルカス号	不詳	ウラジオ
〃 尻矢崎沖	汽船	共同運輸丸	150	解放					速行

1回出撃に際しての兩館住民のパニックや海運業界の動揺などの実情を勘案し、2月29日に至り朝鮮半島の北西海域に進出していた東郷平八郎司令長官に対し、聯合艦隊の有力なる一部をもって浦塩艦隊の跳梁を威圧することを命令するとともに、独立した第3艦隊を聯合艦隊に編入

と第3艦隊の2等巡洋艦2隻を率いて、黄海方面から長駆してウラジオストク港外に急行し3月6日午後に至り結氷海域の薄氷海面から造船施設などに対し艦砲射撃を敢行した。翌7日も港外に近迫し、示威運動と偵察を行つたが、日露両艦隊が交戦するような場面は生起しなかった。

上村艦隊は、元山港を根拠に浦塩艦隊との決戦を企図し、第2艦隊の1等巡洋艦5隻を基幹戦力として、巡洋艦5隻、駆逐艦4隻、水雷艇7隻、通報艦1隻、特務艦1隻、そして艦隊運送船の金州丸をもって、ウラジオストク港外に近迫した。しかし、上村艦隊は濃霧のため攻撃を敢行することができず、むなしく元山港に帰投した。

ところが実は、このとき上村艦隊は濃霧の中で浦塩艦隊と互に行き違つていたのである。それは新しく就任した巡洋艦戦隊司令官イエスセン少将が指揮する巡洋艦「ロシア」、「グロモボイ」、「ボガツイリ」と水雷艇2隻からなる第3回出撃で、元山港周辺の偵察と兩館の艦砲射撃を目的とするものであった。このイエスセン戦隊の出撃により、五洋丸(600トン)は元山港で、金州丸(3860トン)は日本海で、それぞれ撃沈されている。

浦塩艦隊による我が国のシーレーン分断の脅威を排除しようとする上村艦

聯合艦隊司令長官東郷大將は第2艦

隊司令長官上村彦之丞中将に、浦塩艦

隊の制圧を命じた。これにより上村提

督は、自ら第2戦隊の1等巡洋艦5隻

隊の2度にわたるウラジオストク港への攻撃はいずれも不成功に終わってしまった。5月以降、浦塩艦隊の脅威に對して対馬海峡を防衛する任務は、上村提督の第2艦隊が担い、片岡提督の第3艦隊は、満洲の表玄関である遼東半島への後方連絡線の防護に任ずることになった。

#### ◆浦塩艦隊の跳梁跋扈

(明治37年4月25日〜7月25日)

6月12日、浦塩艦隊の第4回出撃は、旅順・ウラジオストクの両艦隊を合わせ指揮する露国第1太平洋艦隊司令長官ベゾブラゾフ中将の直率のもとに行われた。将旗を「ロシア」に掲げ、「グロモボイ」、「リユーリック」の3隻で、対馬海峡の我がシレーンを分断することを狙っていた。

果たして6月15日、護衛艦に防護されることなく、丸裸で航行中の和泉丸(3229総トン)、常陸丸(6175総トン)、佐渡丸(6226総トン)の3隻の陸軍輸送船は、露艦の艦砲により大損害を蒙り、佐渡丸のみがかるうじて沈没は免れた。撃沈された常陸丸と和泉丸には、それぞれ陸軍将兵1千余名が乗船しており、宇宙品を出港し遼東半島に向かうところであった。輸送指揮官の近衛後備歩兵第1聯隊長須知源次郎中佐は、軍旗を奉焼したあと、

従容として割腹自決した。

この悲劇の渦中、対馬に在泊していた上村艦隊は敵襲撃の報告に接するや直ちに全速力で敵艦隊を求め、日本海の西部海域を重点的に搜索したが、濃霧と、浦塩艦隊が遠く北海道方面に迂回して掃投していたので、会敵の機会を得ることはできなかった。

6月28日の第5回出撃も、敵将ベゾブラゾフが直率し、第4回出撃のときの巡洋艦3隻に仮装巡洋艦「レーナ」と水雷艇8隻が増強されていた。30日、元山港を攻撃し、日本人居留地を攻撃し、在泊中の汽船や帆船を焼尽破壊したあと、7月1日には対馬海峡に侵入した。

一方、露国艦隊の元山攻撃の情報を承知した上村提督は、対馬海峡に進出警戒中のところ、同日18時35分ごろ、対馬海峡の東水道において、距離2万2千メートルで会敵した。上村艦隊は、露艦の退路を遮断しようとしたが、ベゾブラゾフは高速で必死に避退行動を行い、日没の暗さに助けられて逃げ切り、7月3日、ウラジオストクに帰投している。

開戦以来わずか半年ばかりの間に浦塩艦隊は、汽船7隻、帆船4隻を撃沈し、我がシレーンを大いに脅威した。ところが第6回出撃では、これまでとは作戦海域を大きく転換し、日本列島

の東側にあたる太平洋海域に拡大してきたのである。

イエスセン少将が率いる「ロシア」、「グロモボイ」、「リユーリック」3隻の第6回出撃は、ウラジオストクを7月17日出港すると、津軽海峡を潮流に乗り21ノットという高速力で突破し、我が国の太平洋側のシレーンを脅威しつつ、大胆不敵なことに東京湾口まで南下接近している。7月23日から25日にかけて、御前崎、石廊崎、野島崎などの沖合いで遭遇する民間船舶を片っ端から臨検したのち攻撃し、北方に立ち去っている。この間、露艦に臨検された船舶は12隻、うち7隻が撃沈され、2隻が捕獲されている。

帰途イエスセンは、東京湾口を脅威したのち、宗谷海峡を経て帰港しようとしたが、濃霧と石炭不足のため、予定を変更して7月30日、潮流が日本海から東方の太平洋側へ流れる津軽海峡を逆に西航し、8月1日、無事にウラジオストク港に帰着し、世界中の人々を驚かせている。これは、我が国の海峽防衛がいかに脆弱であったかを証左するものであったが、実は我が大本営の敵艦隊の海峡通過に関する誤判断もあった。

太平洋海域で作戦中の露国艦隊が、津軽あるいは対馬のいずれの海峡を選定するかについては、大本営と聯合艦

隊とは全く異なる判断をしていた。

大本営は、露艦が太平洋を南下西航して、東支那海から黄海を経て旅順艦隊と合体する公算が大きいと判断しており、対馬に位置する上村艦隊に対しては、7月24日15時、都井岬沖に急行しよう命令した。上村提督は、これにより直ちに対馬を出航し都井岬に向け南下した。

これに對して聯合艦隊の東郷司令長官は、浦塩艦隊は津軽海峡を通過すると判断しており、上村艦隊に對して津軽海峡西口に急行し、露国艦隊の海峡進出を抑えて撃破しよう命令した。同日20時、都井岬に向け南下中の上村艦隊は、東郷長官の命令を受領したが、そのまま大本営の指示により行動を続けた。

敵将イエスセンは、津軽海峡西口での日本海軍との決戦を覚悟していたが、我が大本営の誤判断により救われる結果になった。

旅順に封鎖されていた露国第1太平洋艦隊主力は、8月10日、我が艦隊の封鎖を突破してウラジオストク港に逃れ戦力の統合を果たそうと、大挙して出撃してきた。これに呼応するように、ウラジオストクの司令長官スクルイドロフ中将は、イエスセン少将に對し「ロシア」、「グロモボイ」、「リユーリック」を率いて太平洋艦隊主力の封

鎖突破を容易ならしめるよう命じた。イエスセンは8月12日、対馬海峡に向け航海を開始した。これが浦塩艦隊の第7回出撃であり、後に蔚山沖海戦に発展するのである。

◆黄海海戦(明治37年8月10日)

8月10日、旅順の露国第1太平洋艦隊の主力は大挙して出撃し、我が封鎖を突破しウラジオストクに向かわんとした。しかし、これは我が聯合艦隊の封鎖艦隊の捕捉するところなり、ここに黄海海戦が惹起することになった。

海戦の結果は、1隻の露艦も脱出することができなかったことにおいて、露国の旅順艦隊は失敗し、他方、敵艦隊撃滅の千載一遇の戦機を捕捉できず、1隻の露艦も撃沈させることができなかったことにおいて、我が聯合艦隊は失敗であった。

聯合艦隊は引き続き旅順閉塞作戦を継続しなければならなかった。4月下旬から対馬海峡にあった第3艦隊を旅順海域に転用して、5月上旬の陸軍の第1軍の鴨緑江渡河作戦や、第2軍の塩大澳上陸作戦の援護などにあたられた。一方第2艦隊主力は、ウラジオストク港の脅威の排除と浦塩艦隊の出撃に備えて、対馬を根拠として作戦を展開させた。

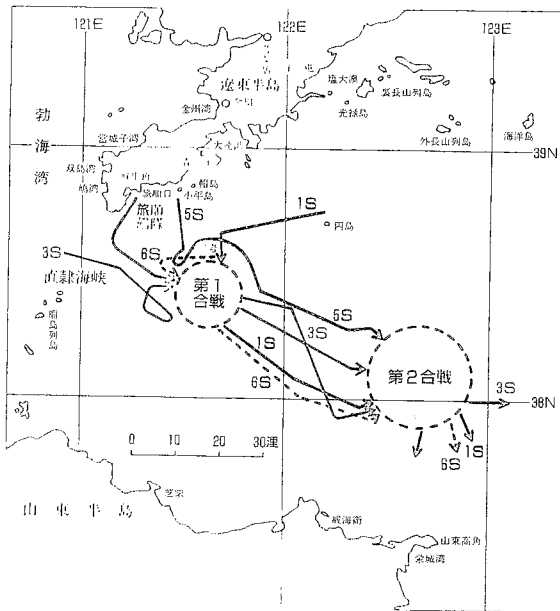
6月23日早朝、旅順港外を哨戒中の

駆逐隊が「敵艦隊出撃」の警報を發した。聯合艦隊は直ちに全兵力に出動を令し、遇岩南西海域に集結して、夕刻に南下する敵艦隊を邀撃しようとしていた。しかし露国艦隊は急速反転し遁走したので、我が艦隊は露艦を取り逃がしてしまい、引き続き監視封鎖を継続するの止むなきに至った。

爾来、我が聯合艦隊は露国旅順艦隊の再出撃を警戒中のところ、8月10日早朝、旅順港外を哨戒中の第5戦隊(橋立、松島)が、「敵艦隊出港南東進」と報告してきた。聯合艦隊司令長官東郷平八郎大將は、全兵力に出動を命じ、自ら第1戦隊を率いて円島から西進、直隸海峡の第3戦隊(巡洋艦5隻、遇岩の第6戦隊(巡洋艦3隻)が南方から、小平島の第5戦隊(海防艦2隻)が北方から、敵艦隊を追跡接触した。

敵艦隊は、戦艦6隻、巡洋艦4隻、駆逐艦8隻の合計18隻の堂々たる戦力であった。一方、我が戦力は、戦艦4隻、装甲巡洋艦2隻、巡洋艦7隻、海防艦3

〔第2図〕黄海海戦(8月10日海戦)行動図(明治37年2月9日~8月14日)



隻の合計15隻であった。別に夜間戦力として駆逐隊・水雷艇隊13隊50隻が集結しつつあった。黄海海戦は、第2図が示すように10日の12時30分~15時の間の第1合戦と17時30分~20時15分間の第2合戦とからなる。本海戦では、1隻の露艦も撃沈し得なかつたが、6隻の戦艦中の1隻、4隻の巡洋艦中の3隻、8隻の駆逐艦中の4隻に損害を与え遁走させ戦線から脱落させたことは、露国海軍の今後の決戦遂行能力を喪失させたものであって、大打撃であったと言つて過言ではない。これに対して我が艦隊は旗艦

「三笠」が被弾により損傷を受けたほか、若干の損害はあったものの、戦闘行動に支障は全くなかつたのである。

〔第2表〕黄海海戦時の日本・ロシアの各指揮官と艦名

日本(聯合艦隊)	ロシア(第1太平洋艦隊)
指揮官・P/GF・東郷平八郎大將	指揮官・P/F・ウイトゲフト少將(戦死)
IS (P三笠、朝日、富士、敷島、春日、P日進)	BS (Pツェザレウィッチ、レトウィザン、ポベータ、Pペレスウェート、セフストーポリ、ポルトーフ)
3S (P八雲、浅間、笠置、高砂、千歳)	Pアウトムスキー少將
5S (P橋立、松島、鎮遠)	CS (Pアスコリド、バルラーダ、ジヤーナ)
6S (P明石、須磨、秋津洲、和泉)	Pレイツェンシテイン少將
dg×5, tg×8	ノーウィク, dg×2

第2表に黄海海戦時の日露各指揮官と艦名を示す。

◆蔚山沖海戦(明治37年8月14日)

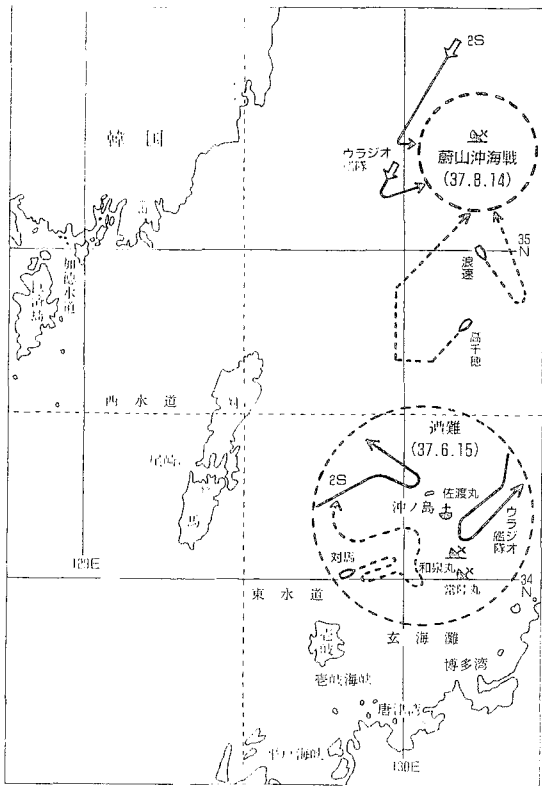
前述のような旅順の太平洋艦隊主力の大挙出撃、ウラジオストクへの転進の企図を承知した同地の最高指揮官スクルイドルフ中将は、イエスセン少将に対して旅順から転進してくる主力艦隊の掩護を命じた。

現実には旅順の主力艦隊は、8月10日のうちにわが聯合艦隊の反撃に遭遇し、脱出転進に失敗し、大部分は旅順に帰港し、一部は南方洋上に逃れたのであったが、このことを知らないイエスセンは、「ロシア」、「グロモボイ」、「リューリック」を率いて、第7回出撃を敢行し、8月14日の早朝、対馬沖に接近していた。

黄海海戦の戦果が不十分であることを熟知していた東郷司令長官は、対馬にある第2艦隊に出撃を命じた。上村艦隊は8月11日出撃し、同14日早朝には、朝鮮半島東岸の蔚山沖に進出していった。その戦闘経過は、第3図が示すとおりである。

上村提督が直率する戦隊は、一等巡洋艦の「出雲」、「吾妻」、「常陸」、「磐手」で編成されており、これらは14日4時50分、「ロシア」を先頭にする浦塩艦隊とは、日出前後の明度のなか距

〔第3図〕蔚山沖海戦の経過



〔第3表〕蔚山沖海戦における彼我の損害の状況

区分	艦種	艦名	排水量(トン)	速力(ノット)	主な砲装	艦長(期)	損傷	記 事
日本	装甲巡洋艦	出雲	9,910	21	20cm × 4, 15cm × 14	伊地知季珍大佐(7)	小破	被弾23、死傷19、後部砲破壊
		吾妻	9,460	20	20cm × 4, 15cm × 12	船井 較一大佐(7)		被弾14、死傷8
		常陸	9,860	21	20cm × 4, 15cm × 14	吉村茂太郎大佐(7)		被弾5、死傷3
		磐手	9,910	20	20cm × 4, 15cm × 14	武富 邦器大佐(外)	小破	被弾6、死傷77、火薬144発
		浪速	3,710	18	15cm × 8	和田 賢助大佐(8)		被弾1、死傷13
		高千穂	3,710	18	15cm × 8	毛利一兵衛大佐(8)		被弾1、死傷7
ロシア	装甲巡洋艦	ロシア	13,800	19	20cm × 4, 15cm × 16	アルノート大佐	大破	被弾42、死傷277 汽缶半数及び煙突大半破壊
		グロモボイ	13,800	19	20cm × 4, 15cm × 16	ダビッチ大佐	中破	被弾28、死傷176 (艦長重傷)
		リューリック	11,700	18	20cm × 4, 15cm × 16 12cm × 6	マッセウィッチ大佐	沈没	被弾50以上、死傷493 (艦長・副艦長死)

離1万メートルの間合いで、いずれの側も相手を確認することができた。両者ともに南下中の会敵であったが、幸運なことに我が第2艦隊は、浦塩艦隊の北方に位置しており戦術的に優位な立場にあった。

イエスセン艦隊は速力を増し、東方に急旋回したあと北東に逃れようとしたが、優位な北方に位置する高速の上村艦隊と砲撃戦となった。激烈な砲撃戦は5時23分から約3時間にわたり行われ、「リューリック」が先ず舵をやられて落伍し、イエスセンは他の2艦もつて4度にもわたり「リューリック」を救出しようとして反転を繰り返したが、遂に断念し北方に逃れた。

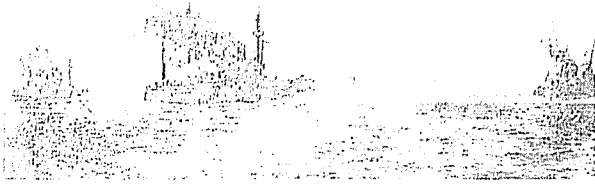
「リューリック」では、艦長が戦死し、副長と水雷長が負傷し、大尉の航海長が指揮をとった。艦が絶望的であることを承知した航海長は、同日10時30分、蔚山の約40カイリの沖合で総員退去を命じ4個のキングストン弁を開いて艦尾から左舷に横転して沈没した。

上村艦隊は、「出雲」からの弾薬欠乏との報告で追撃を断念した。「ロシア」と「グロモボイ」は損耗甚大で、両艦の将校の50パーセントが戦死し、下士官・水兵の25パーセントが死傷し危機的な状況にあった

が、日本艦隊の追撃中止に救われ、8月16日ようやく母港に帰りつくことができた。第3表参照。

かくして日本列島の周辺海域を跳梁跋扈し、我がシーレーンを分断破壊してきた浦塩艦隊の脅威は、ようやく黄海海戦を契機とする蔚山沖海戦の戦果をもって排除することができた。

蔚山沖海戦それだけを作戦・戦闘という次元で捉えれば、追撃中止の決断により「長蛇を逸した」という後世の史家の批判は甘受しなければならぬ。しかし、この困難な一戦により、我が国の生命線ともいうべきシーレーンの安泰を期することができた事実とは、いかなる人物も否定することはできないであろう。



落伍の「リュリック」を助けんとするロシアの僚艦 (東城鉦太郎画)

◆おわりに

開戦初期の我が国にとって、対馬海峡と遼東半島への陸軍部隊の推進と、その後方連絡線の安全の確保は至上命題であった。したがって最も重大なる脅威であった旅順の露国艦隊に対して、我が聯合艦隊の主力をもって旅順艦隊の撃破・封鎖に従事させ、浦塩艦隊に対しては一部の戦力のみを充当したことは止むを得ない対応であった。

このため浦塩艦隊が展開するシーレーンの分断破壊作戦に対しては、必然的な戦力不足に我が海軍は悩まされることになった。この我が方の戦力不足が、浦塩艦隊の跳梁跋扈を許し、ために我がシーレーンを危殆に陥らしめた要因であったことは間違いないことであった。と同時に、露国の第1太平洋艦隊司令長官ベゾブラゾフ中将、巡洋艦戦隊司令官イエスセン少将の卓越した指揮能力も、我が国の朝野の心胆を寒からしめた要因でもあった。

次なる要因として俎上に乗せるべきは、外山三郎元防衛大学教授(海兵66期、元海将補)が指摘する、我が海軍指導層のシーレーンについての戦略・戦術的な対応の未熟さを挙げなければならない。我が海軍は、浦塩艦隊のシーレーン分断破壊作戦に対しては、対馬の竹敷要港を根拠とする監視と間

接護衛のみに終始した。

つまり浦塩艦隊が「シーレーン分断破壊」という「面的な二次元の作戦」を展開しているのに対し、上村中将の第2艦隊は「浦塩艦隊が出撃してくれば、その出撃点に邀撃する」という「線的な一次元の作戦」を採り続けた。緊要な陸軍戦力を搭載する常陸丸や佐渡丸などの航行を艦艇で直接護衛するという方策は採られていない。

鎖国から開国へ急速に国策転換した当時としては、「海上護衛」の思想を求める方が無理なことかも知れない。しかし、頻発する船舶撃沈という事態に遭遇しておりながら、「シーレーン防衛」「海上護衛」という発想が生じなかった要因については、今後の研究課題として残るのではないか。

また同じく野村実元防衛大学教授(海兵71期、元海軍大尉)は、「シーレーン防衛」や「船舶護衛」について、我が国は日露戦争から学ぶことが少なかつたと述懐している。

第一世界大戦で出現した潜水艦・航空機の出現により、海戦様相が「平面的な二次元」から「立体的な三次元」に大きく変化したことは、我が海軍も承知していた。加えて我が海軍もドイツのUボートの脅威から連合国の輸送船団を護衛するための特務艦隊を、地中海やインド洋に派遣するという偉業

を成し遂げ、「船舶護衛」の重要性は認識していたはずである。大東亜戦争における我が国の「シーレーン防衛」「船舶護衛」の拙劣のよって来たる要因は、華々しい艦隊決戦に固執して、シーレーン防衛や船舶護衛を軽視してきた我が国の指導者の戦略的発想の貧困にあった。国家防衛という視点を欠いていたと言わざるを得ない。

海戦史上に燦然と輝く日本海海戦の歴史的な勝利を誇るとともに、浦塩艦隊に我がシーレーンを脅威された歴史的事実から、我々は学ぶべき多くのものを未だ学習していないと反省すべきではないか。

◆引用の主な図表、絵図は全て東郷神社・東郷会発行の『図説 東郷平八郎』を使用した。御了解に感謝します。

(主要参考文献) 海軍軍令部『極秘明治三十七・八年海戦史』(防衛研究所所蔵)。海軍軍令部『明治三十七・八年海戦史』(防衛研究所所蔵)。海軍有終会編『近世帝國海軍史要』原下書房1974年。財団法人史料調査会『海軍文庫』海軍第3巻『日露戦争』誠文堂書株式会社、昭和56年。外山三郎『日露海戦新史』東京出版、昭和62年。外山三郎『図説 日露海戦史』内外出版、2000年。野村実『海戦史に学ぶ』文芸春秋、昭和60年。東郷神社・東郷会『図説 東郷平八郎』平成7年。